

昭和14年8月1日（火）

夜半北風寒い位、猶土用の候なるに、是れは異変とも思はる。朝来薄雲漲り、風強く冷ゆ。裸体の儘横臥すべからず。午後三時より外出。白エナメル40求め、小刀32と合わせ、電車中にて小刀遺失す。合成金ペン先20求め、四時二十分帰宅。西瓜40馳走す。髯剃り、澄子にも剃って貰ふ。？痰を吐く者に対し、本日より処罰せらるることとなる。終日涼風、汗出です。飯宅、白靴にエナメル塗る。

昭和14年8月2日（水）

三時起床、痔出血。昨夜の鯉の甘煮の残りを少し頂く。トマトも食へる余裕あり。五時二十分出発。余り待たずに電車に乗りたり。今日は汽車入駅し居らず。新聞6求む。久子の万年ペン使用し居らぬと云ふので持来る。新田原附近にて驟雨、五六分間にて歇む。九時十分着。照会報告物等山積す。六時飯宅、水浴。此の日は曇天の儘割合に涼し。

昭和14年8月3日（木）

此の朝六時永江氏別府行き。豊後町、一つ松、栄町等、皆局長出席す。朝来降雨、次第に強烈。十時頃秋永鶴居局長臨局、別府より戻りがけ立寄りたる由。永江氏草履穿きにて気の毒故、下駄を買う様、注意せりと云ふ。不老園に泊まりし模様とあり。此の日逡信局より各行局報、南洋に別配達の取扱開始に対する公報所載と相違の点を認め、電報にて抗議す。終日降雨、冷氣肌寒し。珍しく汗出です。六時飯る。赤坊も湯浴み、今日に限り廃止することとせり。

昭和14年8月4日（金）

朝来霽れ、一時曇り。作余の局報抗議に対し、監督に於いては余の見解の誤りを信じ、中津局に電話照会あり。中津局より更に升屋の電話に余を招致して推問す。乃ち八月二日の逓信公報告示を指摘して、其の誤解に非ざる旨を抗弁す。後刻山口主事自転車にて臨局。逓信局にては本省よりの通牒に基づき不取敢、移牒したるものの由。誤解を与ふる如きに至りしは、逓信局の慎重を欠ける結果にして、訂正の要ありと認むる旨、同氏に注意せり。

昭和14年8月5日（土）

此の朝健ちゃん面を冠り来る。和博、羨望歇まず。不用書類の整理に着手。永江氏出勤、婦人一自分独りなりと云ふ。昨夜は六時着。金槌借りて綴り方に勗（つと）む。

昭和14年8月6日（日）

八時半出勤。野口氏休暇、家の手伝いに励む。巖此の朝余に神詣でを薦む。年用??整理に四時までかかる。是永氏0時半帰宅。西瓜を求め方永氏に委嘱せしも、奥様所持しあればとて御金を返却せり。隣家の小母さんトマト数個持来る。是永氏一個を食べ、残余は永江氏に遣る。五時帰宅。永江氏西瓜を切りたるに、既に余去りし後とて残念せりと謂はる。夜愛子、野口氏と鎮守の杜に祭りを見に出掛く。和博の為に面を、悦子の為に首人形を、赤坊の為に嘗（なめ）棒を夫々求め来る。朝の間曇り、次第に霽れ快晴となる。神輿は午後十時頃漸く神域に入る。是永氏の妹君の調製せしと云ふ野口氏の洋服出来たり。乃ち此の新一張羅を着して外出せしなり。

愛子余にも出掛けよと薦む。

昭和14年8月7日（月）

此の朝赤坊を最初、信子を二十分間、次いで智子を同時刻連れて神詣です。巖余の帰宅と同時刻、集金に出掛く。余此日も前日に引続き整理に着手。四時に切上ぐ。松本君と小野純一よりの手紙、福岡より廻し越す。シャツ昨日帰宅後洗濯して貰ふ。此の朝着用。清原鉄雄貯金事故に付き、逋信局より、犯人逮捕に至らしめたるは奇特の至り、尤も表彰の程度に達せぬと云ふ。別に夫れを恃（たの）み居たるに非ざれば、何共思はざりし。四時頃より奥より涼風来る。六時飯る。夜ズボンにアイロンかけて呉る。水浴して裸で愛子と咄して居る。是永氏子供を連れ御祭り見に来たり。光子氏と約束ありしものか、悦子を連れ既に出掛け居たる後を追へたるも、遂に遇わず。其の中に子供眠りしとて、背に負ふて再び来たりしを、余着物を着用して挨拶に玄関に出る。愛子帯を貸して負はしむ。十時半野口氏飯る。随分待ち居る由。御祭りは夜中に及び、益々賑わう。終夜太鼓の音す。

昭和14年8月8日（火）

曇り、驟雨の地あり。巖七時半頃出発。不用書類の整理、午前中にて打切り他の仕事す。案外に快晴となる。午後五時半、野口氏と飯宅。頃日赤坊を首（はじ）め、他の子供まで行水を遣わしてやる。松木氏宛返事出す。先方で返事を待つことを知ればなり。永江氏飴の冷やしたるを呉る。

昭和14年8月9日（水）

晴天。砂塵侵入程度昨日よりは少なし、風向きによる。午後より風あり。日本銀行より記名国債登録除却に関し、回答越せり。之を承け和田村田尻、橋内政市氏に通知す。若松蚕養町局小滝友市氏より返信あり。同氏局長となるに及び、故トメの同僚なる疑いを抱き、開局祝詞と共に尋ね遣りしものなり。果たして其の人なり。トメの死去を知らず哀悼の意を表し越さる。トメ在世ならば懐かしからまし。

昭和14年8月10日（木）

福岡より回送の広美、翠子、二郎よりの手紙来る。広美は毎日十時間勤務にて鍛えらる。漸く人並みとなり、番組の列に入りたる由。翠子は広美仕官の被状、二郎は愚痴を並べ越す。守谷さん窓口に来たり余に挨拶す。頃日頗る元気らし。保険年金の帳簿の整理に着手。帰宅、西瓜一切れ頂く。

昭和14年8月11日（金）

朝中島主事臨局、速達時刻表持来らる。北風奥より来たり、涼し。不用書類整理済み。処分申請書提出。小倉恩給金庫支所より急報呼出し着。升屋より通話す。二通話となり40銭不足分、余立替ふと共に要求せり。今朝巖トマトを摘採り、子供にも野口氏にも呉れたる故、余の分頂きたり。隣家の小母さん来たり、門司より仕官の喜びを齎（もたら）し来たりし葉書を示して、転勤願下げを申出づ。大いに祝意を表し置きたり。同時に余の責任も解除されたるを喜ぶ。

昭和14年8月12日（土）

橋内カツエ氏来たり、一切の書類を持参、代理店に一緒に行かんことを求む。余は直接日本銀行に提出せんとする旨咄し、カツエ氏を帰らしめ、書類を調製して日本銀行宛書留にて発送す。而して其の旨カツエ氏に通知す。30銭茶菓代として光子氏に交付。一時二十分出発、五時到着。岡田光邦の父君、亡妻供養の為来福。此夜一泊、明朝早発の由。恰度睡って居る。夕飯時起こして一緒に下にて食事す。色々変わった咄を聞く。森田さん病気で退職したることも知らざりし。髯剃り、七時半頃、岡田氏息子の薬師屋に居る者に、御寺より電話かけんとて出て行きたる後に外出。八時二十分星野医院に至れば、柳原先生一人居らる。まこと誌頂く。松尾氏も来る。星野先生と四人のみ。生命の実相中の一齣を読み「夫れは一燭園を批評せし件なり」。先生より釘拾いにより溜まりし御金の寄贈よりは喜捨を得（73銭）て、十一時飯途に就き、水浴して寝る時は十二時なりし。

昭和14年8月13日（日）

此の朝五時半岡田氏自転車にて飯局の途に就く。昨日と今日と遠足なりと云ふ。余水添より漸く上り来たりし時なり。同氏を送りて門を開き挨拶して別る。朝の行事は此日に限り休止。御盆の入口とて誰も来て呉れぬ為とあり。午前九時より中等学校野球の競技、甲子園よりの中継放送に、澄子選手の名を別記したる新聞紙を展べて、勝敗に一喜一憂す。午後六時三円借りて明け市場に至り、白砂糖十斤を3,06星野医院に届けしめることを約して、筋向かいの瀬戸物屋より痰壺25を求めて帰る。遊廊戸毎に小火を焚きて靈魂を迎ふ。中には盛んに燃える炎に向けて合掌し居る向きあり。

昭和14年8月14日（月）

立秋に入りて幾日、早くも風の音にぞ驚かれぬる候とはなりぬ。朝来曇天、今日は野球試合の中継なきようなり。然も午後二時より福工対桐生中の試合あり。澄子二階に陣取り応接台を倒して準備初む。0時30分のニュース後もし。体操後漸く聞こえ出す。此頃余手紙書きぬ。三時半書き終わて「まこと」誌と共に、曩に立替えたる拾円と三円六銭、計拾参円六銭払戻し及び年金受領の為、郵便局に至り、恰度取集に来て居る集配員に郵便を渡す。販宅後更に手紙書き、今度は森田氏に宛て、岡田氏より知り得たる材料を基として、病氣見舞いの積もりなり。四時過ぎ西瓜振る舞う、珍しく五片程食す。夜風寒し、床を閉鎖す。毎晩水浴し居たるを今日に限り取止む。涼しく汗出でざりし為なるも、恰度隣家の娘君来て居りし為なり。野球は3対2、福工リード。

昭和14年8月15日（火）

快晴。澄子道子、久子の出勤と共に外出。十一時半頃帰る。市場に行きたるも魚なかりしと。柳原先生より釘売却代七拾参銭、昨日貯金すべき失念、本日澄子に委嘱す。武藤秀夫の子供来宅。昼飯与ふ、西瓜を振る舞う。此の分は岡田氏より貰ひしものと云ふ。今日も五片食ふ。午後三時より野球試合甲子園より中継。森田典子氏、岡田光邦及び小縄友市氏に手紙書き、まこと誌、森田氏に送る。北風涼し。

昭和14年8月16日（水）

晴天なるも風涼し。鮮魚は市場に販らず、盂蘭盆中は漁

業家連も休業し居るものなるべし。珍しく萩の餅出来、三時頃食べよと云ふ。然るに四時頃より、熊工対福工の野球試合の放送初まる。次いで四時のニュースを済まし此の勝負の梟（けり）を聴きて、五時近く夕食の膳に向かう。七時頃再び西瓜の大盤振る舞いあり。六切れ程頂く。此日のは種子黒みを帯びず、概して数日早く摘み採りせし憾みあり。二日程、夜水浴せず、夫れ程風涼し。昨夜は朝方寧ろ寒い位にて、薄い綿入れ一枚にては凌ぎ得ざりし。此日は別の綿入れを出し、浴衣を着て寝る。前夜と異なり風なかりし。十時寢床。久子此日休暇なるも日中外出して家に居らず。七時頃振り子の時計を持来たりて、油さしに一円かかりしと云ふ。

昭和14年8月17日（木）

晴れ、朝冷氣。十時頃より漸く夏らしくなる。朝の間は日光を追う様になる。此の朝も御萩頂く。此日も午後より野球試合あるを聞く。

昭和14年8月18日（金）

餡（あん）、此の朝まで残りあり、之にダンゴを入れて頂く。此日純一君来る。西瓜を出す。市内各商店一斉休業。昼飯にうどんを注文せんとしたるも、販る家なし。僅かに一軒ありて持来る。午後より福工対下関商の試合、皆二階にて聞く。純一氏二時、唐津に行く。可なり暑くなる。福工1対7にて負戦す。二時四十分後の試合は聴かず。関係なき方面なるが故なるべし。午後三時より再び試合状況を聞く。久子府の島に社員と慰安会、七時頃販宅。腹痛み何も食べなかったと洩らし居る。九時三十分頃寢床。余は九時四十分臥床。伏見宮博恭王妃經子殿下、

去月下旬、熱海御別邸に御左胸肋膜炎にて御静養中、一時御軽快に拝せられしが、去る十五日夜以来、御柄勢再び御増進、御心臓御衰弱、背喜殿下を始め奉り各殿下の御心、尽しの御看護と主治医東大稲田博士以下の厚き御手当の御甲斐もなく、十八日薨去（こうきょ）遊はさる。御年五十八。此の為、試合放送停止となる。

昭和14年8月19日（土）

昨夜西瓜を再び頂き、余計な食物が胃の府を驚かし具合悪し。嘔吐し終わりぬ。今朝澄子を見て穢れなしと云ふ。バケツに水を持来たりて、屋根より流下す。赤色した西瓜の乾燥したるものは、容易に流れず。十時頃より試合聴きに來たる久子、幾度便所に行くか知れず、ぐったり寝て居る。昨夜澄子に理髪し貰ひ、今朝髯剃りす。風涼し。六時近く純一氏來宅、水浴して來たりし由。夕飯準備方に付き、頗る困惑したる如し。飯は焦付き方のみ残り、市内にて徴達したる如し。風呂に行く前、余は柳原先生かかり行く。八時達す。静座中西南学院生二名の外、家の人二名のみ、珍しき少人数。十一時閉会、先生停留場まで送り來らる。家に皈りたるは十一時四十分、水浴して寢床に入りし時は十二時。割合に風鮮（すくな）し。

昭和14年8月20日（日）

四時起床、戸外にて体操す。久子昨日まで苦悶し、皆を困らし腰を揉ましたるも今朝以来鎮静、本など見て居る。純一氏に色々一燭園事情など咄す。十時過ぎ道子送りて発足、動物園を見、午餐を餐し二時の汽車にて出発せる由。澄子例により、今日の海草対下関商の優勝試合の実



況を聴く。剃刀研ぐ。純一氏より寄贈の西瓜は同氏が居る間に出す。余は前日に懲り、一ヶを食したるのみ。三時中等学校野球大会は、5対0にて海草の勝ちに終わる。道子大分散財せしと訴ふ。五拾銭与ふ。猶納税三円四十銭も道子に支払方托す。斯くする間に午後四時となる。今朝義夫より礼状来る。十九日母と治良と墓掃除に行くことにして居ると通知あり。剃刀研ぎ、澄子に理髪し貰ふ。九時四十分寢床。

昭和14年8月21日（月）

午前三時起床。白靴大分痛み居るも、国策に順応し忍びて履いて出掛く。五時十分、新聞を求め乗込む。暑気可なり強し。至れば机上、三等局長連合会より電信電話用紙、多数送付ありたるを堆積しあり。見れば無集配として不用のもの多し。橋内政市氏に日本銀行より返事あり、移牒し手紙出す。ラジオ申込み七通、野口氏より受領、発送。玉塚三郎仕官、三十六円発表あり。六時野口氏と一緒に飯る。此日中島主事臨局。国債申込み勧誘の序でと認めらる。昨日曜ピンポン試合、高女校にて各方面の選手来津。後藤寺局より河野主事来たりし由。余を訪なふ積もりらしかりしも、不在の旨咄し置きたれば、立寄らざりしなるべしと云ふ。此の日野口氏、去る十三日土曜日夜腹痛、生憎医師誰も来て呉れず、苦悶せし旨咄す。後刻漸く或る医師来たり注射したる由、夫れが為、日曜日は終日臥床の由。大分暑い。二十日より防空訓練に入る、夜燈火管制。ラジオ完全に補修されあり。中井に頼みたる由。

昭和14年8月22日（火）

暑気盛り返せし感あり。文夫より二十三日亡父五十日祭の旨、速達葉書にて通知。引続き普通便にて同様の通知あり。到底参加不出来の旨、回答せり。此の朝、香茶一斤煎りたるもの60銭にて求め、局に持参。信子手に縫い立つ、繰り返し要求す。本日代引き小包到着通知、局に受取り、局出頭、時刻記入漏れに対し受取り申出づ。電話するに猶留め置きたる由に付き、不都合を詰る。直に集配員をして特配せしむ。印紙明朝九時に交付を得たき旨、電話す。木下主事承諾し呉る。販るさ永江氏に明朝御金準備を命ぜしに、何の挨拶もなし、不用なるべしと云ふ。現金は高額の場合、先に預かり置く例なりと云ふ。販れば巖、既に赤坊に行水を遣はせし後なり。午後七時夕飯。九時四十分寢床。

昭和14年8月23日（水）

印紙購入に不来。余は木下氏に葉書にて、叙上の事情に依り買受けに出頭せぬ由通告す。午後より風出でたるも、一時的。橋内カツエ氏妹来局。請求書及び送付郵便料22銭持参せり。森田典子氏、国府安門古阿南??鍼灸科医院より返事越せるものを、福岡より回付あり。今朝愛子より、若松小茶より写真送付越せしものを示し、広美の嫁に付き曩に斡旋依頼せしに対し、返事あり。夕飯時信子食膳を目認?突進し来る。野口氏抱き秋吉方に行く。余飯を済まして信子を野口氏より受取り、三十分間程散歩す。昨夜は販るさ眠りたるも、此日は眠らず。風の音秋らしくなる。不用書類、此日発送す。

昭和14年8月24日（木）

午後一時四十分頃、雷鳴あり。朝シャツ洗濯、代わり分

愛子持来る、午後四時半退局。大分早く出たため船町テントやに廻り、小母車船、曩の改造方相談す。幾つか頼まれて造りし由。先日も警察の人に拵え遣りたる由。4, 50銭と云ふ。厚手中古の布を補綴して、同様の値段にて製作すべしとのことに頼み、夕刻信子を小母車に入れて挽き行く。途中破損の部落下、信子背中を擦傷す。抱きて行く。可なり重く流汗。頃日、毎就寝前水浴、野口氏汲み呉る。

昭和14年8月25日（金）

此の朝巖大きな音にて愛子を罵（ののし）る。後にて聴きしことなるが、巖が出掛けんとする際、赤坊に乳を呉れて行く様咄せしに、今出掛くる際、何のことだと痛憤し、夜も早くから寝るは如何と詰りしものの由。野口氏は愛子に同情し居れり。電話にて栄町局長に、用紙中不用分を尋ねたるに、後刻行くとのこと、少時して同局長至り不用分指摘。巖午後臨局。ラジオ申込み一通持参、今朝一通の分と都合二通発送。飯宅すれば巖大いに働き居たり、雑巾かけまでせり。

昭和14年8月26日（土）

巖後刻野口氏に余宛て仏前へ五円送り越す。内4, 50を野口氏に渡し、小母車を持来す様依頼す。中尾氏より小包送付越せり。新宿三越より菓子一、靴下一と例の一あり。菓子箱は永江氏に局員に分配依頼、靴下は巖・野口氏に。猶今月分拾円紙幣一枚、角封筒に入れ野口氏をして巖に送る。給料下渡し。午後一時二十分発汽車十分遅れ、三十五分発車、午後五時前到着。水浴後夕飯。七時過ぎ牛乳に氷を入れたるもの二杯飲む。此れは胃腸を

害せしもの多しと認む。久子横臥床中、驚きたり。大分巖の叱られたるものと認む。

昭和14年8月27日（日）

朝神様を拝まんとする六時三十分、佐世保より原川氏、昌光及び浦川某来邸、二階に招じ話を聴く。余の分、商事株式会社取締役として登録あり、是れは二年前に遡及の関係上、一片の内容証明では有効ならずとて、効果を遡及する方途を採り、駒次への分も譲渡を還元するの手續きに出て、書面を松原氏より徴し来たりし由。佐世保の方も先方方の申出を、其の儘書面に認め、更に決議録を作成、九千余円を引出し居りしを三千円弱に、六千余円は総て会社の責任に属する旨の解決を採り、十一月まで一切始末することとし、再び問題を其の時に保留することとなせりと云ふ。ビール半打246、赤貝の缶詰一ヶ、梨子三、葡萄一盆、午後0時10分ビール一本を残して切上ぐ。浦川氏は鉱山方面の官庁関係に、鉱業主との間の締結の衝に当たり手腕あり。弁護士に非らざる如し。正午朝飯兼夕飯共に食す。昌光は洗濯屋も出入り常ならず、大阪に連行して教育すと云ふ。道子一円呉れたる由。浦川氏は高宮に七時頃行き、九時頃飯り来たり。一時五分の汽車にて出発、途中立寄る処ありと云ふ。午後より次第に天候険悪化し、風頗る強し。夜に至り南の雨戸を閉鎖す。夜食を欲せず、九時四十分寢床。

昭和14年8月28日（月）

北野氏よりの返事及び森田氏よりの返事等書く。星野先生へ去る十四日、明市場に砂糖10斤配達方依頼したるに、相手の店員は女子にて頼りのない挨拶なりしを以て、果

たして配達して呉れしか気懸かり故、照会せり。本日平沼内閣総辞職、欧州政情の変革は、独乙との防共協定を根柢より破壊せし責任を採りたるなり。午後湯浅内府西園寺老公を訪ふて、七時頃帰京し閣下に奉答し、今夜中にも内閣主班を決定、任命せらるるやも不図と云ふ。午後三時頃より風少しく収まる。断雲中碧空を見る、今朝ぱらぱらと小雨降る。乾き切りたる土壤を湿すに定まらず。雨乞い各所に行はる。

昭和14年8月29日（火）

快晴なるも風強く、砂塵濛々として二階も曇白し。剃刀研ぐ。星野先生より葉書にて返信来る。砂糖確かに受領せりとあり。是れにて安神せり。八日市一弘氏哈肩濤？中央電話局庶務課に栄転の通知あり。夕方中津赤坊の為に便器を求むべく、市場かかり行く途中、簗島橋際にて、秀夫が局販り、余の家に至るに逢ふ。曰く久子ちゃん病気の由、後刻再び会ふべしと答え、アオキ市場に行き、入口の店にて尋ねたるに、幸ひありと云ふ。小のみあり80銭にて求め 販れば七時十五分。二階に上がらず秀夫と九時半頃まで咄す。三ツ谷に幸作の娘御幸が、南会津の或る二男坊の許に嫁したるが、一女を挙げ亭主に死別し、こちらに来たりたき旨手紙ありしも断りたりと、今は三ツ谷に居る由。夜も風強く扉を締む。

昭和14年8月30日（水）

三時起床、五時十分便器を携（たずさ）ひ出発。新聞6求め、九時五分到着。此日も風強く列車中凌ぎ良し。但し局舎内、街路より侵入の砂塵に机上白き堆る。山本聾記者来局、暫く咄す。茶を出す。玉塚三郎、小母さんに

連れられ挨拶に来る。稗取締従軍の為、自宅の始末に来れるものの由。菓子折持来、局員に振舞へと云ふにぞ貰ひ受けたり。五時半、丸ボールの例の折り箱を開きて局員に振舞ふ。テントやに至る。新品切れ来たりたれば、是にしては如何と云ふ、6, 50と称す。色々過去の咄などして6, 00に値切り、明夕刻までに作製を約して販る。野口氏もテントやまで来て居る。今夕食御萩の馳走あり。

昭和14年8月31日（木）

電話室設備方に付き督促あり。コンパス17, 三角定規1, 60求め、保険料2, 10支払ふ。残金取集め漸く六円調達す。六時近くまでに図面を仕揚げ発送。テントやに至り小母車を受取る。家の小僧に届けしめん旨申出づるも、余挽き販宅す。野口氏早く販る。巖販らず。赤子の行水、愛子独りにて埒明かず。余の行水中、巖販る。ラジオ申込書徴収の為、区域外に進出し居る模様。夕食後赤子に和博、悦子も連れ外出。テントやに至り挨拶して、消防屯所を左折、風呂屋の前に出て販る。悦子転び手を汚す。販宅、水道にて手足を洗ひ呉る。智子途中眠る。新聞充分見る暇なし。七時のニュースも聞かれず。